

インターン研修を終えて—ふたつの「生」との出会いの宝箱—

2006 年度インターン

(東京大学文化資源学研究専攻)

インターン研修を通して学んだ最たることは、「生」との出会いの宝箱としての美術館の姿ではなかったか、と思っています。展覧会でみる過去のモノの集積場としての美術館とは異なる側面を見せていただく、貴重な機会をたくさんいただきました。ここでいう、「生」にはふたつの意味があり、ひとつにはモノの「生」、もうひとつには人の「生」です。

まず印象的であったのが、モノの「生」の出会いでした。展示室のガラスケースの向こうではなく、収蔵庫で、または調査先の個人宅で接するモノは、どれも生きているように存在感を放っていました。そして、そのモノ自体に宿る生き生きとした魅力はもちろんのこと、展覧会として結実する過程でモノがあらゆるところから集結してくるダイナミックな動きまで感じる事が出来たのは、調査や発送依頼書準備から展示替えの様子まで様々な業務を見せていただいたインターン研修ならではの経験でした。

そして、モノの「生」に加えて、私にとってはかけがえのない宝物となったのが、人の「生」、特に神奈川県立近代美術館の魅力的な学芸員の方々との出会いでした。美術に対して、仕事に対して、熱心に取り組まれている姿を見ながら、お話をさせていただきながら、とても刺激的な有意義な時間を過ごすことができました。鎌倉館も葉山館も、都心から近くはありません。しかし、その道のりさえ楽しむことが出来るような、濃密な体験と素敵な出会いが詰まった経験をさせていただくことができました。

インターン研修を終えて

2006 年度インターン

(横浜国立大学芸術系教育専攻)

インターンのあいだは、主として所蔵品総目録に関わらせていただきました。目録作りはデスクワークが中心ですが、調査というかたちで収蔵作品に接し得たことは望外の喜びでした。年報を資料として読むことで、美術館の基本的な役割のひとつである作品の収集について知ることができたのも幸いでした。目録は作品管理のための膨大なデータベースであり、収蔵作品の居場所を明らかにするものだと思います。

鎌倉館・鎌倉別館・葉山館と三館分の展覧会があるので、それだけでも忙しいなか展示替えも見学させていただき、それぞれの作品が輝くための的確な配慮や指示を目の当たりにし、貴重な経験をさせていただきました。ほかにも様々な書類作成や展覧会のための準備など、短い間に多くのことを学び、充実した時を過ごすことができました。

鑑賞者として訪れるだけでは想像もできないほど、美術館というところは、ひととものが、ひととひとが、そして、美術館の内部と外部が交錯する運動の場であることが実感されました。作品が作家の生き方に深く根ざすものであるように、美術館でさまざまなあられる相もまた、ひとびと自身の生き方に根ざすものであると思います。

最後になりましたが、未熟な私にいろいろと教えてくださった学芸の方々はじめ、美術館の皆様に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。